



[シン・エッセイ]

記憶にのみ残るもの

めのう

半開きになった扉の向こうから声がする。昼食をとり終えて、昼寝をしていたはずの娘が、ひとりで話している。訝しんで部屋を覗くと、誰も座っていない小さな子供用の椅子に向かって、最近気に入っている絵本を開いている娘が見える。それはまるで、そこに娘以外の子供がいるかのように、たどたどしく、ときどき詰まりながらも、母を真似て読み聞かせている。

そんな娘の姿を見た私の母は、本当は一体どんな気持ちだったのだろうと、考えることがあります。

幼いころの私には、私以外には見えない友人がいました。

彼女の姿はもう思い出せません。一緒に公園でブランコに乗ったことも、水族館でイルカショーを見たことも、もちろん私が気に入りの絵本を読み聞かせてあげたこともあるはずなのですが、もう覚えていません。母によると、彼女は私が幼稚園に入園した頃からあまり姿を見せてくれなくなりました。初めて自分から声をかけてお友達を作ったあたりで、とうとうすっかりいなくなってしまったようです。

彼女に関する私の唯一の記憶は、もう彼女が見えなくなってしまうてからのものです。幼稚園の教室で、ふと、彼女にもう会えないことに気がついて、何もない場所に向かって、「もう大丈夫だよ」と伝えたことだけは、確かに覚えています。彼女は私より少し背が低かったのでしょう。私はその床の色も、落ちていたおもちゃの形も、影が左に伸びていることも、はっきりと思い出せるのに、この記憶に彼女はもういません。

ただ、どうやら私は彼女の姿かたちを記録することに成功していたようです。当時、我が家にはWiiがありました。任天堂のゲーム機で、既にサービス終了からかなりの年月が経過し、中古品でさえも見かける機会はほぼないくらいなので、「世代だね」なんて言われてしまうかもしれません。Wiiには、Miiというアバターが作れる機能があって、私が彼女のMiiを作っていたと、父が記憶していました。今でも私の家のどこかには、似顔絵でも粘土細工でもなく、彼女のMiiのデータがあるわけです。面白い時代です。

私がそのデータをどうにかして見ようという気にならないのは、きっとあの日からずっと私が“もう大丈夫”だからなのでしょう。

また、イマジナリーフレンドが現れる理由について、孤独感やネグレクトなどが挙げられる

ことがあります、少なくとも私に関してはそのような事実はなく、両親は私に目をかけて育ててくれたことだけ、ここに明記しておきます。

私は“目に見えないもの”に対する強い憧れがあります。

中でもとりわけ好きなのが、妖怪や幽霊などの怪異です。というと、「自分は幽霊が見えるから……」と思う方もいるでしょう。苦勞なさっているところ大変申し訳ないのですが、羨ましい限りです。私には第六感や靈感と呼ばれるものが、清々しいほどにありません。

この憧れがあるから私がイマジナリーフレンドの彼女を度々思い出すのか、または彼女が居たからこそ私がこの憧れを抱くに至ったのか、少なくとも、私の人生に大きな影響を与えたことは確かです。

それでも、昔は怪異を人一倍怖がっていました。特に“鬼”への恐怖はひとしおで、幼い私に対する「鬼さん来るよ」の効果は非常に高かったようです。

私は聞き分けの良い子供ではなく、むしろ強情で我儘でした。布団に入る時間に関しても例外ではなく、何度「そろそろ寝ようか」と母が声をかけても、「これが終わったらね」と理由をつけて躲そうとするのです。

それが始まる時、最初に動くのは父です。我が家のリビングには、道路に面した窓があり、普段はカーテンがかかっています。そのカーテンをほんの少し開けて、外を覗いた父は、小さな声で私に「大変や。鬼さんそこまで来てる」と囁き、そのまま「お父さんちょっと足止めしてくるから」と、玄関を出て行きます。迫真の演技に、その時点で私の顔は真っ青です。その間、実は父が外で煙草を吸っているだけとは、当時の私は知る由もありません。

次に母です。「急いでおもちゃ片付けないと、さっきまでここにいたことがバレちゃう」と言い終わる前に、私が慌てて片付け始めるのを、どんな顔で見ていたのか、悔しいことに一度も振り返る余裕などなかったほど、当時の私は真剣でした。

子供に対して、可能な限り「子供だから」と言わない両親でした。「鬼さん来るよ」さえ本気の演技で取り組んでいたと思います。

現在でもなお、ときどき布団の中で、我が家の前のあの道路に今、鬼が来ているという想像を巡らせることがあります。もうすっかり成長してしまった私が起きていることに気づいて、鬼は一瞬だけ我が家の前で立ち止まります。そして、結局私を連れて行く気にはならず、立ち去って行くのです。今となっては、たとえばスタジオジブリ作品の『千と千尋の神隠し』を観てまず「いいなあ」と言うような私です。しかし、鬼が去って行くところまで想像した私は、つい安堵して、そろそろ本当に眠らなければ、と布団を掛け直します。

あんなに鬼を怖がっていた私が、目に見えないものに憧れるようになった大きなきっかけはやはり小説でしょう。現在私の部屋の本棚には、見事なくらいに妖怪や幽霊が登場するファンタジー小説がならんでいます。最近は、ホラー小説もかなりの冊数になってきました。

一人っ子の私が、イマジナリーフレンドの次に友達に選んだのが、小説だったのかもしれませんが。小学生の頃から、冒険譚でも、伝記でも、ミステリでもなくファンタジーばかり読んでいる私は、思考のほとんどがファンタジックになってしまいました。私の脳みそは、どうやらこの現実世界ではなく、好んで読んでいる小説の世界に適応してしまったようです。

さまざまな弊害が出ていますが、特に困ったのは“将来の夢”について語らなければならないときです。

言うなれば、私の人生の軸足は、イマジナリーフレンドと遊んでいたあの頃からずっと私のファンタジックな脳内にのみありました。それを矯正しないまま、小説の世界に入り浸り、年を重ね、経験を積むにつれ、叶わないとは知りつつも、もう後戻りすることはできないところまで来てしまっているのです。だからこうやって、空っぽの今を隠して、幼い頃を振り返るばかりの文章を書くに至っているのでしょう。

“将来の夢”について考えるとき、私はその事実を直視せざるを得なくなります。

そのとき私は、急にこの世界の端っこに追いやられて、ひとりきりで遠くにいる人々を眺めることしかできないような気分になります。彼らはときどき、こちらにいる私に気がつくのに、次の瞬間には目を逸らして、どこかへ歩いて行ってしまいます。こうなったのは全てあなたの責任ですよと、目に見えない誰かに突きつけられているようです。イマジナリーフレンドの彼女に伝えた「もう大丈夫だよ」が、崩れ去ってしまいそうになります。

そして、それならばいっそ、誰からも見えなくなってしまうたいと思います。

ここで、どうにかして、少しでも追いつけたらと思えないところが、私がいつまで経ってもこの性質に甘んじ、とうとうこのような人間となった理由なのでしょう。

もし、私がこの世界の誰からも見えなくなっても、永遠にも近い時間を、ひとりで過ごすことになったら……。

私は、目に見えないものに対する、強い憧れを持っています。

ここまで読んでくださった方は、一度この文章の冒頭を読み返してみてください。私の憧れの形が顕著に表れてしまった部分です。

私の本当の将来の夢とはつまり、昔からずっとそういうことでした。怪異側になってしまえば、この出来損ないの私が、正しく意味を持ってくれるような、そんな微かな希望に縋っているのです。

誰にも見えなくなった私は、誰も住んでいない古い家で雨風を凌ぎ、たまに街に出かけては、道の真ん中でスキップをして歌います。誰も私に気がつくことはありません。お腹は空かず、体は汚れず、眠気もないけれど、私は眠るのが何よりも好きなので、1日の半分くらいは目を閉じて過ごすでしょう。

そんな生活に、生きている意味を見出すのはきっと難しいはずなのに、誰にも見えぬ私

は、今よりもずっと、自分の生きる理由について考える回数が減っているのです。

それでもたまに、誰かが今の“目に見える私”を思い出したとき、ぎゅっと心が苦しくなります。たとえばこの文章は、私があなたに見えなくなってからも残るものでしょうから、そういう機会もあって欲しいものです。そのうち私は、今の私のこんな想像など忘れて、あなたの目に映って、一言だけでも、なにか言葉を交わしてみたいなど考えることだろうと思います。

そのとき初めて、私にとって、今の私が意味を持つかもしれません。